

松 山 大 学 論 集
第24巻第4 - 2号抜刷
2012年10月発行

近世南アジアの貨幣制度と
18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性

谷 口 謙 次

近世南アジアの貨幣制度と 18 世紀ベンガルにおける貨幣の多様性

谷 口 謙 次

目 次

1. 問題設定
2. 近世南アジアの貨幣制度
 - 2-1 ムガル帝国
 - 2-2 その他地域
3. 18 世紀ベンガルにおける貨幣の多様性
 - 3-1 制度的要因
 - i) 年次割引の実態とカレント・ルビー
 - ii) 多様なルビーと地域別・商品別の銀貨使用
 - 3-2 社会経済的要因
 - i) 18 世紀南アジアの経済発展
 - ii) 18 世紀ベンガルにおける市場構造
 - iii) 市場構造と貨幣の多様性の関係
4. 小結

1. 問 題 設 定

17 世紀末までベンガルを支配したムガル帝国の貨幣制度は、極めて精緻で洗練されていた。このシステムによって 16 世紀後半から 17 世紀のムガル経済の成長が促され、地税の現金納化といった徴税システムの革新にも貢献したと考えられてきた¹⁾。しかし、イギリス東インド会社（以下 EIC と略す）による植民地化が始まった 18 世紀後半のベンガルでは多様な銀貨が流通する状況であった。

植民地期初期のEICによる貨幣政策の目的の一つは、銀貨の多様性を是正することにあった。当時のベンガルでは様々な種類のルピー銀貨が流通し、地域ごと商品ごとに使い分けられていた。J.C. シンハによれば、ベンガルは経済が発展し、手工業はヨーロッパ諸国より進んでいた。貿易や商業の取引量も相当な額に達していたため、貨幣の多様性は経済に悪影響を及ぼしていたとしている²⁾。なぜ、洗練された貨幣制度から貨幣の多様性は生じたのだろうか。ムガル幣制が導入されてから200年間に、南アジアやベンガルではどのような変化が生じたのだろうか。これが第一の問題点である。

貨幣の多様性に関してピレンヌは、貨幣の地方性や不統一が商業流通の量的増減に依存していると述べていた。またミトラは、ベンガルにおける貨幣の多様性は関係の希薄な市場関係や市場間のコミュニケーション不足を表していると論じた。つまり、貨幣の多様性は経済の後進性を表している、と一般的に理解されてきた³⁾。しかし、上述したように当時のベンガルは経済発展がみられた地域であった。あるいは、貨幣の多様性が政治的混乱によるという議論も存在する。例えば、プラカシュは18世紀ベンガルにおける貨幣の多様化の要因として帝国の衰退による品質管理の消失を挙げている⁴⁾。しかし近年、ムガル帝国の衰退によって南アジア経済の衰退や行政システムの停滞が生じなかったという議論が数多く出されている。貨幣の多様性は経済の後進性や政治的混乱によって生じたのであろうか。そうでないとするならば、どのような要因が考えられるだろうか。これが第二の問題点である。

以上を踏まえ、本論文では次の二点について論じることとする。第一に、ムガル帝国を中心に近世南アジアの貨幣制度を概観し、その性格を検証する。その際、17世紀における南アジアへの銀の大量流入とその影響についても考察する。第二に、18世紀後半のベンガルにおける銀貨の多様性を概観する。これによりEICは徴税やいわゆるインヴェストメント⁵⁾において著しい不便を強いられたが、その多様性をできるだけ詳述する。そして、その要因について制度的要因と社会経済的要因の二つについて考えることとする。最後に、近年論

じられている近世世界における貨幣の多様性との類似性や関連性について論じることとしたい。

2. 近世南アジアの貨幣制度⁶⁾

2-1 ムガル帝国

ムガル帝国の貨幣制度は一般的に「三貨制 (Trimetallism)」と言われる。帝国が発行した鑄貨が金貨、銀貨、銅貨であったことから呼ばれた。ムガル幣制の原型はベンガルのスール朝にあった。1540年代にムガル帝国と激しく争ったスルタン、シェール・シャーはそれまでの合成鑄貨タンカ銅貨⁷⁾ 中心の幣制を改め、三貨制を導入した。これをムガル皇帝アクバルが修正した上導入したとされる⁸⁾。

三種類の鑄貨はそれぞれ異なった性格を持っていた。モハール金貨は一般的に儀式・贈答用もしくは蓄蔵用に特別に鑄造されるものであり、市場では流通しなかった。銀貨はルピーとその小額銀貨であるアンナが存在し、アンナの価値はルピーの1/16であった。銅貨(ダム又はパイサ)は小額取引用であり、恐らく民衆が最も眼にしたのは銅貨であっただろう。これらの鑄貨は純度が非常に高く、金貨は重量が169グレイン⁹⁾でほぼ純金、銀貨も178グレインから180グレインで、合金率が4%を超えないよう定められていた。銅貨は323グレインであったが、アウランゼーブ期に銅不足のため1663年に重量を2/3にしたものが発行された。三貨の公定レートは当初1ムフル=9ルピー、1ルピー=40ダムとされたが、実際のレートは市場で決定されていた¹⁰⁾。

これら以外に、南アジア西部グジャラート地方ではデリー・サルタナット期から流通していたマフムーディ銀貨が流通していた。グジャラート王国は1572年にムガル帝国に併合されたが、それ以後も数名のラージャが鑄造を続けていた。マフムーディ銀貨が使用され続けた理由として、スラトの資金がデリー方面へ流出する傾向が強かったため、この地方のみで利用できる鑄貨を持つ方策が取られた、とプラカシュは説明している¹¹⁾。さらに、子安貝による貝貨や不可

食アーモンドといった非規格貨幣も一部の地域で流通していた。貝貨はベンガルや南アジア東部の沿岸地域で、不可食アーモンドはグジャラート地方で主に使用され、少額貨幣として銅貨に代わって利用された¹²⁾

ムガル帝国の貨幣制度の特徴には三点が挙げられる。第一に、「自由鑄造制」である。これは、地金の持つ者であれば誰もが鑄造所へ出向くことができ、地金や古くなった鑄貨を名目手数料、すなわち鑄造に掛かる物的費用と鑄造益金¹³⁾で鑄造依頼できる制度であった。新鑄貨の額は鑄造所へ渡した地金や鑄貨の重量や純度によって変化した¹⁴⁾

ムガル帝国は鑄貨を広く流通させるため、各地に鑄造所を建設した(表1)。アクバル期にはかなりの数の鑄造所が建設されたが、ジャーハンギール期には鑄造基準の統一性を確保するために減らされた。その後再び増加するが、それは領土拡張のためだけでなく、商業や貿易といった経済活動の拡大も大きな要因であった。だが、鑄造所の増加により鑄貨の重量や純度にばらつきが生じる結果にもつながった¹⁵⁾

第二に、ムガル幣制が海外からの貴金属供給に依存した点である。なぜなら、南アジア、特に北部地域では貴金属がほとんど産出されなかったためである。銀はほとんど産出されず、銅産出はとても需要を賄えるものではなかった。貴金属供給地は主に中南米、日本、そしてヨーロッパであったため、鑄造所は主要な貿易港や内陸の貿易中継地を中心に建設されていた。「自由鑄造制」もこうした環境によるものだと考えられる¹⁶⁾

表1 ムガル皇帝支配期別の鑄造所数

	金	銀	銅	合計
アクバル	21	45	64	86
ジャーハンギール	15	27	12	32
シャー・ジャハーン	24	37	16	43
アウランゼーブ	45	83	26	87

(出典) Mallick [1991] p. 36.

17世紀に入り南アジアに大量の銀が流入したが、その要因はポルトガルとスペインによる大航海時代の到来であった。1415年のポルトガルによるセウタ島占領から始まる大航海時代は、一方でポルトガルによる喜望峰経由の南アジア航路の発見、他方でスペインによるアメリカ大陸の発見、さらに太平洋横断という東西両方向からアジアへのヨーロッパ諸国の進出という形をとった。その結果、ヨーロッパと中国・南アジアといったアジア中核地域への貿易経路が、西アジア経路のレヴァント貿易から複数に拡大することとなった。また、スペインによる中南米の銀鉱山開発により、新大陸産の銀が南アジアに大量に流入し、その経済に大きな影響を与えた。

南アジアへの銀流入経路は、大きく三つに分類される。①レヴァント貿易によるヨーロッパから西アジアを経由するルート、②オランダ東インド会社（以下 VOC と略す）による日本からバタヴィアを経由するルート、③ヨーロッパ各国の東インド会社による喜望峰を経由するルート、であった。17世紀以後喜望峰ルートは興隆し、流入量は増加していった。17世紀を通じて、このルートからアジアへの流入量は少なくとも15,000～16,000トン、年平均208～325トンであった。もちろん、このすべてが南アジアにもたらされたわけではなく、中国へも流出したことは注意すべきであろう¹⁷⁾

これまでレヴァント貿易が17世紀に入り、喜望峰ルートの興隆に押され衰退していったと言われてきた。しかし、ファン・サンテンは VOC によるペルシア・紅海貿易の分析から、17世紀以降も貴金属が西アジアから大量に流入していると結論付けた（表2）¹⁸⁾ さらに、スブラマニヤムはファン・サンテンを含む1980年代以降の諸研究から次のように論じた。1600年から1750年までのレヴァント貿易ルートおよび喜望峰ルートへの銀輸出力を比較した結果、レヴァント貿易による銀輸出力が1600年から1750年まで減少しておらず、年平均50トン、17世紀から18世紀半ばまでにおよそ7,500トンが西アジアから輸出されたと結論付けた（表3）。レヴァント貿易を経由した銀のすべてが、西アジアから南アジアへ再輸出されたわけではないが、恐らく半分程度は南ア

表2 VOCによってスラトに輸入された金銀の推計(単位:1,000 グルデン)

年度	バタヴィア(1)	日本(2)	ペルシア(3)	モカ(4)	合計(1+2+3+4)
1628-9	560	0	0	0	560
1635-6	?	?	?	?	660
1636-7	450	0	0	0	450
1637-8	411	0	0	0	411
1638-9	109	705	0	9	823
1639-40	?	?	?	?	1,000
1640-1	38	604	62	2	707
1641-2	150	997	0	0	1,148
1642-3	151	300	96	85	632
1643-4	101	450	200	111	863
1644-5	126	494	235	105	961
1645-6	186	0	263	89	538
1646-7	?	0	190	90	?
1647-8	0	0	217	0	217
1650-1	0	0	519	0	519
1655-6	0	0	474 ^(注1)	0	474
1656-7	0	0	321 ^(注2)	0	321 ^(注2)

(出典) ファン・サンテン [1992] 142 ページ。

(注1) ペルシアとモカからの合計

(注2) 321 は 312 の誤りであろう。

表3 ヨーロッパからの銀輸出量(年平均, 単位:トン)

期 間	レヴァント	喜 望 峰	そ の 他
1601年-1625年	50	8	45
1626年-1650年	50	19	56
1651年-1675年	50	20	59
1676年-1700年	50	53	53
1701年-1725年	50	85	53
1725年-1750年	50	101	59

(出典) Subrahmanyam [1994] p. 198.

ジア西部へ輸出されたと考えられた。これらからスブラマニヤムは、17世紀に入ってもレヴァント貿易を経由する西アジアからの銀流入量は減少しなかったと論じた。つまり、レヴァント貿易経由の銀流入は喜望峰ルートの発見によっても衰退しなかったのであった¹⁹⁾

複数の経路を介した銀の大量流入により、ムガル帝国の主要貨幣は銅貨から銀貨に変化した。ハビブによれば、16世紀後半のアクバル期には軍隊の俸給や地稅徴収、食料や日用品の取引は銅貨建で行われていた。しかし、首都アグラでは1620年代から1630年代に貨幣使用に大きな変化が生じた。地稅徴収から賃金、価格表示の多岐にわたって銅貨から銀貨への変化が見られたのであった。この傾向は17世紀後半の 아우ランゼーブ 期に他の地域でも見られるようになった²⁰⁾

第三に、年次割引の問題がある。上述したように、鑄貨の価値は物的費用と鑄造益金の和に等しいはずであった。しかし、実際には鑄造に時間がかかるため、新鑄貨はそれより高い価値を持った。さらに、鑄貨には鑄造年度が刻印されたため、摩滅の状態も加味されて年を追うごとに価値が割り引かれることとなった。銀貨の場合、新銀貨はシッカと呼ばれ、前年以前に鑄造され、現在流通しているものはチャラニと呼ばれた。ハビブによれば、シッカ・ルピーはチャラニ・ルピーに対し5%のプレミアムを持っていた²¹⁾

年次割引により、貨幣制度は三つの性格を持つこととなった。第一に、銀貨が鑄造所へ自然と還流するようになったことである。銀貨の価値は年を追うごとに割り引かれたため、年々地金価値に近づいていく。そのため、古くなった銀貨は鑄造所へ持ち込まれ、再鑄造されなければならなくなった。その結果、時間が経つにつれ古い銀貨がそこへ還流することになった²²⁾ 第二に、銀貨の価値が毎年変動し、鑄造年度ごとにそれぞれ交換レートが生じることとなった。ハビブが述べたのはあくまで理論値であり、実際には、鑄造所ごとに銀貨の重量や純度が異なることから鑄造所ごと、鑄造年度ごとに細かいレートが形成された。その上、経済力の弱い地域では貨幣不足が慢性的であるため、古い

銀貨であっても流通することとなった。第三に、サラーフと呼ばれる両替商の役割が大きくなったことである。「自由鑄造制」や年次割引の問題により、帝国や州政府はそれを直接管理することが困難になったため、彼らは広く貨幣制度を管理するようになっていった。当局は貨幣や金融に関する技術もサラーフや他の金融商に依存していた。そのため、鑄造年度ごとの交換レート形成など制度の根幹にかかわる部分でもサラーフに大きく依存せざるを得なくなり、彼らの役割は拡大していったのであった。

2-2 その他地域

ムガル帝国の貨幣制度は17世紀の半ばまでは南アジア北部でのみ機能していたものであった。デカン高原を中心とする南アジア中央部や南アジア南部では異なった貨幣システムが存在した。

南アジア中央部のデカン諸王国²³⁾ではタンカ銅貨が主要な鑄貨であり、地税も銅貨で徴収された。しかし、後述する南アジア南部で鑄造された金貨も広く流通していた。例えば、ゴルコンダ王国では南アジア南部との貿易や戦争によって、現金や戦利品、貢納など様々な形式で金貨が流入するようになっていた。しかし、こうした状況は17世紀後半にムガル帝国が侵攻してきたことで変化していく。ムガル帝国の征服と拡大によりデカン地方にも鑄造所が建設され、銀貨流通が浸透していく。1687年から88年にビジャプール王国とゴルコンダ王国が併合されたことにより、銀貨流通の拡大は顕著となった。それは、帝国が許可証を発行することで多数の鑄造所建設が建設され、貨幣鑄造額を増加させたためであった。しかし同時に、銀貨の重量や純度を一定に保てなくなってしまった²⁴⁾。

他方、南アジア南部では金貨が主要な鑄貨であった。主要金貨はパゴダまたはフンと呼ばれ、重量は53グレインでヴィシュヌ神が刻まれていた。また、1/2パゴダやファナムと呼ばれる小額金貨も鑄造された。ファナムは最も小さい金貨の1つとして知られているが、その重量はわずか5グレインしかな

かった。これらの金貨はヴィジャヤナガル王国期に鑄造され、王国が崩壊した後もヒンズー諸王国やゴルコンダ王国が鑄造を続けた。金貨は一般の商取引でも広く使用され、銅貨も鑄造されて小額取引に用いられた。ヒンズー諸王国も 1687 年にムガル帝国に併合され、銀貨を中心とする貨幣システムが採用される。しかし、その後も金貨の生産及び使用は続いた²⁵⁾

南アジア中央部、南部での金貨使用は南部での金産出によるとされるが、その産出量だけで貨幣需要を賄えたとは考えにくい。スプラマニヤムによれば、南アジア西岸のマラバール海岸部の諸都市が金の産出地である東アフリカや東南アジアと 16 世紀以前から盛んに貿易を行っていたことが要因であると述べている²⁶⁾

3. 18 世紀ベンガルにおける貨幣の多様性

2-1 においてムガル帝国の貨幣制度を概観したが、そこでは金貨、銀貨、銅貨が明確な役割を持つ画一的で洗練されたシステムとして描かれていた。しかし、18 世紀ベンガルの実態はそのような画一性と大きくかけ離れていた。当時のベンガルで使用された貨幣はルピー銀貨と貝貨であった。貝貨は銅貨の代わりに小額貨幣として使用されたが、交換機能しか持っていなかったとされる。バザールなど市場地での小両替商はポッダールと呼ばれたが、彼らは農村市場地の入口で民衆が持ち込む銀貨と貝貨を交換し、民衆が市場地から退出する時に残った貝貨を銀貨と交換した。民衆の保蔵貨幣は銀貨のみであったと考えられる²⁷⁾

貨幣システムの主要な役割を果たしたのはルピー銀貨であったが、重量・純度のどちらも異なる、様々な種類の銀貨が幅広く流通していた。銀貨は商品取引や地稅徴収に関係していたために、多様性による複雑さは EIC の当局者たちの頭を悩ませることとなった。以下では、銀貨の多様性の実態と要因を制度的要因と社会経済的要因とに区別して論じることとしよう。

3-1 制度的要因

i) 年次割引の実態とカレント・ルピー

重量や純度が厳密に決められているはずの銀貨がベンガルにおいて多様化した第一の要因に年次割引の問題がある。ムガル帝国では新銀貨をシッカ、流通中の銀貨をチャラニと呼ぶことはすでに述べた。しかし、18世紀ベンガルでは少し異なっていた。シッカ・ルピーと呼ばれた銀貨は、新銀貨だけでなく、鑄造2年目のものも含まれた。鑄造3年目以降の銀貨はソナット・ルピーと呼ばれ、シッカ・ルピーとは異なる銀貨とみなされた。このため、地税は必ずシッカ・ルピーで支払うことが求められた。

ベンガルでは年次割引による銀貨価値を正確に計るために、カレント・ルピーと呼ばれる計算貨幣が使用されていた。計算貨幣とは実際存在しない架空の貨幣単位であり、すべてのルピー銀貨はこれに基づいて価値が計られた。例えば、シッカ・ルピーとソナット・ルピー、他地域のルピー（後述）は以下のようになった。

鑄造1年目のシッカ・ルピー＝16%＋カレント・ルピー（SRs. 100＝CRs. 116）

鑄造2年目のシッカ・ルピー＝13%＋カレント・ルピー（SRs. 100＝CRs. 113）

鑄造3年目以降のソナット・ルピー＝11%＋カレント・ルピー（Rs. 100＝CRs. 111）

他地域のルピー＝10%＋カレント・ルピー（Rs. 100＝CRs. 110）²⁸⁾

この割引率はバッタと呼ばれ、主にサラーフが決定していた。上記の計算が認められるのは、すべてのルピーがシッカ・ルピーと同重量であることが原則とされていた。減価率はサンワット・ルピーでは5%にもなり、鑄造手数料分を越えないとする原則を超えているものであった²⁹⁾。しかし、実際には多様な銀貨流通の状況が生じたことにより、カレント・ルピーは同重量のルピー銀貨の価値表示だけでなく、すべての銀貨の価値表示を行うようになっていった。

カレント・ルピーを導入することで、銀貨の偽造や摩滅といった問題は解消されたが、古い銀貨を毎年鑄造し直すことはできなくなった。また、カレン

ト・ルピー自体の価値を決定する規制自体が欠けていることも大きな問題であった。カレント・ルピーが様々な銀貨の価値を表すならば、その価値基準といったものが本来は決められなければならない。そうでなければ、それぞれの貨幣をカレント・ルピーに置き換えることができないはずである。しかし、実際にはそのような価値基準が明確にはなっていなかった。そのために、EICによる銀貨改革時にはカレント・ルピーの減価といった問題が生じることとなった³⁰⁾。

銀貨が減価することを利用してサラーフは大きな利益をあげていた。シッカ・ルピーが3年後にソナット・ルピーになったとき、その額面は鑄造1年目と比べると111/116に減少するが、再鑄造すると価値も116/116に戻る。再鑄造費を差し引いてもその利益は2～3%になった³¹⁾。

ii) 多様なルピーと地域別・商品別の銀貨使用

多様化の第二の要因として、複数の鑄造所の存在が挙げられよう。ベンガルには鑄造所がムルシダバード、パトナ、ダッカ、カルカッタの四ヶ所存在した。これらの鑄造所において、異なった重量や純度、刻印で鑄貨が鑄造されていた。例えば、1770年ごろ兵士達の俸給がパトナ・ルピーからムルシダバード・ルピーに変更された際、彼らはこのムルシダバード・ルピーを受け取ることを拒否した。なぜなら、ムルシダバード・ルピーはパトナのそれより重量や純度が劣っていたためであった³²⁾。

しかし、単に重量や純度の相違だけが価値の相違につながったわけではなかった。プラカシュによれば、ベンガルでは17世紀まですべての鑄造所の銀貨は、同価値での取引が保証されていたが、18世紀に入ると額面通りの取引が行われなくなったとしている。1717年のEIC駐在官によれば、ダッカやパトナのルピーはムルシダバード・ルピーと同重量、同純度であったにもかかわらず、フグリなどで2～3%減価した価値で取引されたということであった³³⁾。

さらに、ベンガル以外の南アジア地域から銀貨が大量に流入していた。それ

は、ベンガルの貿易が好調で輸出超過のためであった。流入銀貨の代表例がアルコット・ルピーである。南アジア南部のアルコット州には、マドラス、ボンダイチェリー、ナーガッパッティナムというイギリス、フランス、オランダの植民地都市がそれぞれ存在した。各東インド会社は1740年にアルコット州太守から貨幣鑄造権を得て、それぞれがアルコット・ルピーの名前で銀貨を鑄造していたが、これらがベンガルに大量に流入していた³⁴⁾

ベンガルには、地域ごと、商品ごとに使用される銀貨が異なるという複雑な実態も存在していた。まず、表4、表5から各県・各地域の使用銀貨を考察しよう。二表より作成した図1から明らかなことは、例外はあるものの銀貨使用の地域がほぼ三つに区分されることである。上述したアルコット・ルピーはダッカ、チッタゴンなどのブラフマプトラ川流域以東の各県・各都市で主要な銀貨として流通した（Aゾーン）。他方、ムルシダバードやフグリなどのガンジス川流域及びデルタ地域の各県・各都市ではシッカ・ルピーが主要であった（Bゾーン）。カルカッタもBゾーンに含まれる。ディナジプルやビルブームな

表4 ベンガル・ビハール各県における使用通貨の種類⁽¹⁾

県名, 地域名	貨幣の種類
ナディア, フグリ	シッカ・ルピー
ビルブーム, マルダ	ムルシダバード・ソナット・ルピー
フッティ・シング (ムルシダバードの郡)	ムルシダバード・ソナット・ルピー
ブルネラ (ビハール州)	バトナ・ソナット・ルピー
バルベズ (マイメンシンの地域)	フランス・アルコット・ルピー
ランプル	フランス・アルコット・ルピー
	ナラヤニ・ルピー ^(注)
ダッカ, ティペレラ	フランス・アルコット・ルピー
	イギリス・アルコット・ルピー
パチエット	ベナレス・ルピー, アワード・ルピー

(出典) J. C. Sinha [1927] pp. 113-116.

(注) クッチ・ビハールで鑄造されたルピー銀貨。その価値は一般のルピー銀貨の約半分。

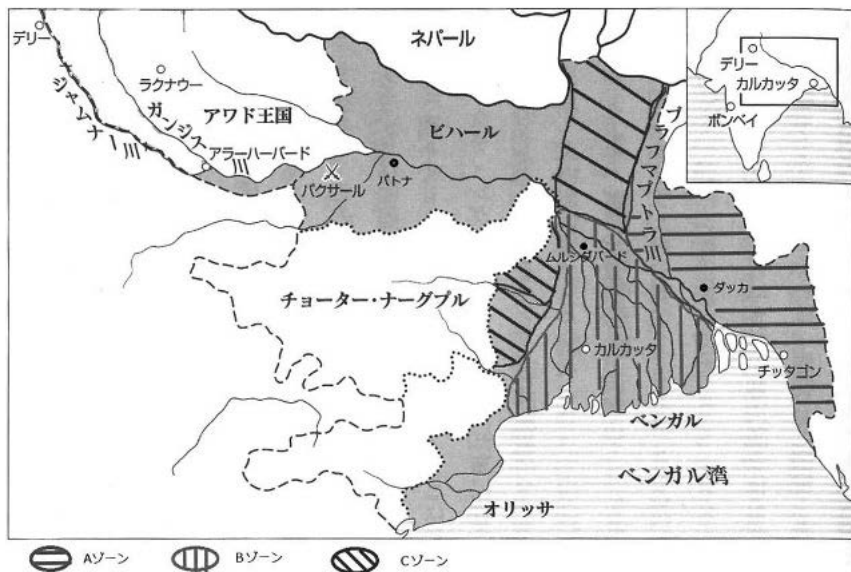
表5 ベンガル・ビハール各県における使用通貨の種類(2)

県名・地域名	主要通貨の名前(注)	他の通貨(注)	報告時期
ダッカ	様々なアルコット・ルピー	52種類ものシッカ・ルピー	1787年
チッタゴン	5種類のアコット・ルピー	シッカ・ルピー(パトナ, ダッカ, ムルシダバード, スラト, ムッサリ・バンダル)	1787年
ランブル	フランス・アルコット・ルピー	ナラヤニ・ルピー	1787年
マイメンシン	アルコット・ルピー	様々なシッカ・ルピー	1787年
ディナジプル	ソナット・ルピー	フランス・アルコット・ルピー, シッカ・ルピー	1788年
ジェッソール	シッカ・ルピー(10年度, 11年度, 15年度, 19年度)	ムルシダバード・ソナット・ルピー, 1年度から9年度までのパトナ・シッカ・ルピー, 6年度イギリス・アルコット・ルピー	1787年
ナディア	12年度ブーリー・ソナット・ルピー	15年度から19年度までのカルカッタ・シッカ・ルピー, 11年度と12年度のムルシダバード・シッカ・ルピー	1788年
ムルシダバード	シッカ・ルピー(8年度, 9年度, 11年度, 12年度, 15年度, 19年度, 20年度)	様々な年代のソナット・ルピー, アルコット・ルピー(フランス, イギリス)	1788年
ミドナブル	ムルシダバード・シッカ・ルピー	イギリス・アルコット・ルピー, スラト・ルピー	1787年
ティルット*	シッカ・ルピー(ムルシダバード, カルカッタ), パトナ・ソナット・ルピー	その他様々な通貨	1788年
ガヤ*	シッカ・ルピー(11年度, 12年度, 19年度)	ソナット・ルピー	1788年
サーアバード*	カルカッタ・ルピー(徴税用)	パトナ・シッカ・ルピー, パトナ・ソナット・ルピー, ベナレス・ルピー, グラクプール・ルピー	1788年
チャブラ*	パトナ・ソナット・ルピー	不明	1788年
ブルネラ*	パトナ・ソナット・ルピー	ムルシダバード・ソナット・ルピー, モンゲール・ルピー, アルコット・ルピー(イギリス, フランス)	1788年
バーガルプル*	ソナット・ルピー(パトナ, ムルシダバード)	シッカ・ルピー(パトナ, ダッカ, ムルシダバード, ダッカ, ベナレス), アルコット・ルピー	1788年
ラージマハル*	同上	同上	1788年

(出典) Mitra [1991] pp. 76-78. (なお, ミトラは Board of Revenue(Misc.) 18th April 1788, Vol. 33. Mint Committee Prgos. 18 August 1792. などからの参照と記す。)

(注) いずれも年度はムガル皇帝在位を表す。また, *はビハール州の県を表す。

図1 植民地初期のベンガル管区における貨幣分布図



(出典) 小谷汪之編 [2007] 273 ページに筆者加筆修正。

どの大河流域やデルタ地域から外れた北部や西部ではソナット・ルピーが主要な銀貨であった（Cゾーン）。これらの他、ビハールでは、東部の各県ではパトナ・ソナット・ルピーが主に使用され、中央部では主にシッカ・ルピーが使用されていた。³⁵⁾

ベンガル東部でアルコット・ルピーが広く流布した要因には、鑄造所の立地条件と上述した好調な貿易があった。ベンガルの四鑄造所のうち東部に属するのはダッカだけであったが、それだけでベンガル東部の貨幣需要を賄うことは不可能であった。また、ダッカは重要な貿易都市であり、特に綿織物、塩、ピンロウジはベンガルの他地域だけでなく、南アジア南部へも輸出されていた。その結果、対価として流入したアルコット・ルピーが流通の中心となったと考えられる。³⁶⁾

次に、各県や各地域で商品ごとに異なる銀貨が使用されていた実態について考察しよう³⁷⁾。J. C. シンハが示した表6のうち、ディナジプル、ジェッソール、ピシュヌプルのあるバンクラの各県は県内の生産品が明らかである(表7)。二表を比較するとある特徴が明らかとなる。それは、貨幣使用の主要な銀貨が県内の主要産品と結びついていたという点であった。

ディナジプルはベンガル北部の農業県であり、米作がその中心であった。手工業製品としては藍や砂糖、綿織物、絹織物などがあったが、農産品と比べるとその規模は小さいものであった。県全体の輸出はほとんどが米であり、19世紀初頭においても米の輸出額は約326万ルピーにも達し、工業製品はいずれもその1割程度にしか満たなかった。ここから、農産品輸出により流入するソナット・ルピーが県内で広く流通したと推測される³⁸⁾。

ガンジス川下流域に位置するジェッソールの場合、農産品の中心は米であり、その半分は県外への輸出に向けられていた。また、穀物もかなりの量がカルカッタへ向けて輸出されていた。ビンロウジやココナッツは県の南部が生産地で、その大部分が輸出された。綿織物が生産されていた関係で綿花栽培も行われており、綿花や綿糸の輸入もされていたがその規模は小さいものであり、工業の中心は砂糖生産であった。これらから県外向けの産品がシッカ・ルピーと結び付き、ムルシダバード・ソナット・ルピーと結び付いている産品はいずれも中心的なものでなかったと考えられる³⁹⁾。

西部のバンクラの場合、農産品では米が、工業品では綿織物、絹織物がそれぞれ中心であった。輸出入先は主にカルカッタやフグリ、ミドナプルといった都市や県であった。輸出品としては上記の三品目のほかに油用種子や繭玉といったものがあり、輸入品には塩やタバコ、スパイス、ココナッツなどが中心であった。しかし、輸出が輸入を圧倒的に上回っており、貿易によって潤っていた。ここから、輸出品と結びついたソナット・ルピーのほうが広く使われたと考え得る。ただ、ダシュマシャ・ルピー⁴⁰⁾はそれほど広く使われたものではないことは確かであろう⁴¹⁾。

表6 各県・各地域での通貨ごとの購買可能商品

ディナジプル	
様々なソナット・ルピー	米, 穀物
フランス・アルコット・ルピー	ギー, 油, ショ糖
イギリス・アルコット・ルピー	
フランス・アルコット・ルピー	麻, ズック
ゴーラガート (ディナジプルの地区)	
シッカ・ルピー	米, 穀物
ムルシダバード・ソナット・ルピー	砂糖, ショ糖
フランス・アルコット・ルピー	綿布, 塩, ビンロウジ
ジェッソール	
シッカ・ルピー	米, 穀物, ビンロウジ, 砂糖, ショ糖, ライム, ココナッツ
ムルシダバード・ソナット・ルピー	綿布, ギー, 油, 赤唐辛子, ターメリック
フランス・アルコット・ルピー	塩
アッティア (ダッカ北部)	
フランス・アルコット・ルピー	穀物, ギー, 油
イギリス・アルコット・ルピー	綿布
チャンデリー	
シッカ・ルピー	穀物, 竹, 油, ショ糖, 砂糖
ダスマシャ・ルピー	綿布, 真鍮, 他の金属
ビシュヌプル (バンクラの地域)	
ダスマシャ・ルピーの古貨	油, 真鍮, 他の金属, ギー
ソナット・ルピー	穀物, タバコ, ショ糖
アルコット・ルピー	綿布

(出典) J. C. Sinha [1927] pp. 113-116.

表 7 各県の主要生産品

ディナジブル	
農産品	米, 菜種, マスタード, サトウキビ, ビンロウジ
工業品	藍, 砂糖, 綿織物, 絹織物
ジェソール	
農産品	米, 麦, インディアン・コーン, マスタード, 亜麻の実, 唐辛子, ビンロウジ, ココナッツ
工業品	砂糖, インディゴ
バンクラ	
農産品	米, マスタード, 綿花, 亜麻, インディゴ, サトウキビ, ビンロウジ
工業品	綿及び綿製品, 石器の食器, 砂糖

(出典) Hunter [1876a] pp. 244-245, p. 303, Hunter [1876b] pp. 244-245, pp. 276-278, Hunter [1876c] pp. 390-391, 谷口晋 [1987] 84 ページ。

以上, 地域ごと, 商品ごとの使用銀貨の実態を示したが, このような状況はなぜ生まれたのだろうか。複数の鑄造所の存在や, 域外貿易に伴うアルコット・ルビーの流入などの要因だけでは, このような複雑な状況を説明することは難しい。そこで, 次に当時の南アジアやベンガルを取り巻く社会経済的要因について考察することとしよう。

3-2 社会経済的要因

i) 18 世紀南アジアの経済発展

従来, 南アジアは 18 世紀に経済的に衰退したと考えられていた。ムガル皇帝アウランゼーブが死去して以降, 後継者争いと地方勢力の台頭のためにムガル帝国は急速に衰退した。これに伴い南アジアの経済も混乱し, 衰退したと理解されてきたのだ。しかし近年, この時期に南アジア経済が発展したという「18 世紀再検討」論が展開されている。それらの議論は, ムガル帝国衰退後の州太守による「継承国家」やマラータ・シク教徒による「地方政権」の樹立を「地

方の時代」の到来だと肯定的に理解するものである⁴²⁾

それらによると、まず18世紀に南アジア全体で緩やかな人口増加が続き、地方の支配者たちはその恩恵を受ける事となった。ムガル帝国期の大都市は衰退したが、「継承国家」や「地方政権」の主要都市はむしろ成長した。彼らは自らの政治的財政的基盤を確立するために、デリーやアグラから避難してきた貴族や官僚を保護し、ムガル流の行政システムや徴税システムを導入した。特に、徴税システムは効率化が進み、地税や貢納の現金納化が浸透した。これにあわせて農業も大きな変化を受けた。納税のために農産物の現金化が必要となったため、換金作物の導入が急速に進み、農業技術の導入も積極的に行われた。富裕農民層は市場の動向をにらみながら作付けをし、作物を販売するため自らも市場に参加するようになった。

また、南アジアの貿易は海外貿易や地方貿易、アジア間貿易とも拡大し、手工業生産は刺激を受けて発展した。こうした動向により、商業活動は大きく発展した。海外貿易の中心はヨーロッパ諸国との貿易であった。オランダやイギリスなどの東インド会社は当初、香辛料を求めて東南アジアにやってきたが、この時期に彼らの商業活動は南アジアを中心に行われるようになった。彼らが南アジアで求めた商品は綿織物や生糸、藍や硝石であった。しかし、対価となるヨーロッパ産品がほとんどなく、新大陸から流入した銀地金を大量に輸出したのであった。これに刺激を受け、地方貿易やアジア間貿易も拡大したが、ここでは綿織物や生糸、奢侈品も扱われたが、穀物や砂糖、ギーや塩といった食料品が主要商品であった。

こうした状況下で市場システム確立や運営に様々な人々（地主、商人、金融商、地方の小支配者、徴税請負人、地方官僚等）が地方エリート層を形成し、活動を行った。ある者は農民や手工業者に必要な資金を前貸ししたり仲介したりすることで生産活動を後押しし、またある者は地方支配者たちに行政や軍事活動の資金を提供する一方、様々な特権を得たり徴税請負を行ったりした。地方エリートの中には自らの事業を拡大し、地方支配者や各東インド会社と結び

付く者も多く現れた。政治権力（行政、徴税、軍事）・農業・手工業・商業の相互連関が拡大した一連の現象について、ベイリーは「商業化」、パーリンは「貨幣経済化」と呼んだ。

パーリンによれば、一連の経済発展によって貨幣使用が地方にまで浸透し、これに対応するため18世紀に南アジア全体で鑄造所数は増加した。だが、鑄造所の増加に合わせた技術革新や技術者の増加は見込めず、その結果、鑄貨の質は低下することとなった。つまり、ベンガルで生じた鑄貨が多様化する要因は「商業化」や「貨幣経済化」といった南アジア全体の現象の中にあった。

ii) 18世紀ベンガルにおける市場構造

次に、ベンガルの市場構造について、谷口晋吉と神田の研究に基づいて述べることとしよう。当時のベンガルの農村市場地にはハット、バザール、ガンジの三種類が存在した。ハットは村の週市で生活必需品が小売りされる場であり、バザールは農村や都市の常設市で小売り、卸売りの両方がなされた。そして、ガンジは域外市場と農村内部市場をつなぐ卸売市場で、都市の広域商人や卸売り商人が倉庫や支店を構えていた。これらを結節点にして、市場は階層化・環節化していた。神田によれば、ガンジは特に重要な役割を果たし、ここを境に穀物を中心とした市場取引は「地方取引」（「地域内取引」）と「地方間取引」（「地域間取引」）を構成していた。「地方取引」はベパリやパイカールといった小商人が担っていた。彼らは農民への前貸しや域外商品の集荷など域内市場を保ちながら、ガンジへ穀物などの供給も行っていた。他方、「地方間取引」は、広域商人あるいは「ガンジの商人」とよばれる商人によって担われた。彼らは小商人や仲買人、あるいは生産者から直接商品を買付け、他の市場や海外への輸出商人に供給された⁴³⁾「地方取引」と「地方間取引」について、谷口はベンガルの農産物市場を農村内部市場循環（「地域内取引」）と外部市場循環（「地域間取引」）の二重構造と捉えているが、神田は「地方間取引」の下部構造として「地方取引」が存在するという垂直的な構造でなく、それぞれがガンジを

通じて並列的に結びつくと捉えている⁴⁴⁾

ベンガルのもう一つの特徴は、ガンジス川、ブラフマプトラ川とその支流によるデルタ地域という地理的性格を利用して、河川交通網が発達した点である。河川ルートは川沿いルートと河川同士を結ぶ水路を経由するルートが存在した。河川交通網には二つの特徴がある。第一に、交通の方向である。河川交通網は河川沿いに上下するには適しているが、渡河が伴う移動には不便が伴うのである。その結果、地域や市場地間の連関は隣であっても渡河を伴うより、河川に沿った上流一下流が一般的なものとなっていた。第二に、運行に季節的制約があった点である。穀物などの嵩高品の輸送は舟運に大きく依存していたため、乾季に運行不可能や積載量の軽減、小型船への積み替えなど制約が生じたのであった⁴⁵⁾

iii) 市場構造と貨幣の多様性の関係

ベンガルの市場構造と貨幣の多様性にはどのような関係があるのだろうか。まず、「地域内取引」と「地域間取引」の重層・環節構造との関係について考えてみよう。「地域内取引」と「地域間取引」、あるいは「地域市場」と「地域間市場」において異なる貨幣が使用される貨幣構造がベンガル以外でも様々な時代や地域でみられた。中世ヨーロッパにおいて「地域市場」で銀貨が、「地域間市場」で金貨が使用されとしたブロックや、中国における銀と銅銭流通の関係を述べた黒田、南アジアにおける銅貨や貝貨といった少額貨幣と高額貨幣の関係を示したパーリンなどがある。ここでは最も理論的である黒田の議論を基に説明しよう⁴⁶⁾

黒田によれば、「地域内取引」や「地域市場」では銅銭、銅貨や貝貨といった小額貨幣が広く使われ、「地域間取引」や「地域間市場」では金貨や銀貨といった高額貨幣が使われる傾向がある。少額貨幣は小口でスポット取引向きであり、高額貨幣は大口で先物取引や決済に向いていると考えられる。少額貨幣は「地域市場」内を流れ、高額貨幣は地域間を往復するということに流通する

回路が異なるため、市場地では多数の両替商が両者を変換する機能を担っていた。さらに、銀貨同士であっても高純度と低純度の間にも機能の相違が形成された。中央政府が指定する徴税・財政単位としての銀貨が高純度になるのに対して、民間側では低い純度の銀貨が広く流通する傾向があった。特定の商品取引と特定の銀貨が結びつく現象はここから生じると論じている。つまり、貨幣流通構造は高額貨幣と少額貨幣の二層構造でなく、高純度銀貨と低純度銀貨、そして少額貨幣の三層構造が生じたと論じている⁴⁷⁾

彼の議論に加えて、「地域市場」圏ごとの経済規模の差異も重要な要因と考えられる。例えば、セイロンを1796年にEICが領有したが、当時流通していた貨幣はオランダが発行した不換紙幣と銅貨であった。セイロン植民地政府は新たな紙幣を発行したが、19世紀初頭の政策が安定しなかったために発行した紙幣が不換化した。彼らは追加で銀貨を発行せざるを得なかったが、その銀貨の大部分もすぐに大陸側へ流出したのであった。その後、セイロン政府とEICは30年以上をかけて不換紙幣の回収と貨幣の安定を図ろうと時に大量の銀貨投入を行った。しかし、セイロンが大陸側に対して常に貿易赤字を抱える構造であるために銀貨流出を止めることが難しく、時には良質の小額銅貨まで大陸に流出するほどであった⁴⁸⁾

ベンガルでは地域ごとに使用される銀貨が異なっていたために、こうした事態が避けられたと考えられる。デルタ地域ではシッカ・ルピーが主に流通したが、そこにはカルカッタやムルシダバードといった大都市や大規模なガンジが存在した。その上、徴税用銀貨であったシッカ・ルピーはカルカッタに集められた。それに対して、これらの後背地であり穀倉地帯でもあった北部や西部でソナット・ルピーが主に流通したのは、貨幣需要を満たすため銀貨の数量を確保することが一義的であったと考えられる。特に、徴税期にはシッカ・ルピーが大量に流出することを考慮すれば、ソナット・ルピーの方が数量を安定的に確保できたであろう。東部で外部から流入したアルコット・ルピーが広く流通した理由も同様のものだと考えられる。以上のように、市場の重層性・環節性

と地域経済の規模の差異といったものがベンガルに多様な貨幣が流通する状況を生み出したのである。

4. 小 結

金貨、銀貨、銅貨に基づいた、ムガル帝国の「三貨制」は非常に精緻なものであった。重量や純度は細かく管理され、時には重量・純度を維持するために鑄造所が閉鎖される時期もあった。ムガル帝国は「自由鑄造制」と年次割引という二つのシステムを導入した。「自由鑄造制」により、帝国は貨幣素材獲得に煩わされることがなくなったが、同時に貨幣供給を管理できなくなった。また、年次割引によって古くなった銀貨が鑄造所へ還流するようになる一方、鑄造された年ごとに交換レートが形成されるようになった。結果的に、これらはどちらも18世紀に顕著になる貨幣の多様性の要因となった。

16世紀半ばに成立した貨幣制度はおよそ100年間維持された。しかし、17世紀半ば以降、日本や中南米の銀地金が海路・陸路を通じて大量に流入したことや経済発展による貨幣経済の深化により、南アジア全体で貨幣の多様化はゆっくり進んだと考えられる⁴⁹⁾。多様化は18世紀になって顕在化したのであり、ベンガルの事例はその一部に過ぎないと考えられる。つまり、16世紀後半以降200年間の変化は、ムガル幣制に内在した問題と経済環境の変化の二点によるのであった。

経済発展や貨幣経済化は地域経済の貨幣需要を高めたが、それを満たすための大量鑄造は均質性を犠牲にしたため、多様な貨幣を生み出す結果となった。パーリンによれば、18世紀に南アジア南部で鑄造所数が増加し、銀貨・銅貨共に低純度のものが数多く鑄造されることになった。しかし、これは南アジア全体に広がった貨幣経済に対応して、鑄造コストを減らし流動性を増加させるためであったと考察している⁵⁰⁾。

その上、ベンガルでは重層的・環節的な市場構造という要因も存在した。ハット、バザール、ガンジという三種の市場の存在により、市場取引は「地域

内取引」と「地域間取引」を構成し、互いに有機的な関係を形成していた。加えて、デルタ地域という地理的特性を生かした河川交通網の発達により、かえって地域経済の連関が制限された。その結果、市場構造の重層性・環節性は強まることとなった。つまり、18世紀ベンガルにおける貨幣の多様性は経済の後進性や政治的混乱によるのではなく、むしろ経済発展と市場構造によるものであった。

さらに重要なことは、貨幣の多様性がベンガルや南アジア特有の事象ではなく、近世期には世界各地で見られたことが近年の研究で明らかになったことである。近世期の日本や中国、西ヨーロッパでもベンガル同様の貨幣の多様性が見られ、しかも、その背後に市場の重層性・環節性の存在が指摘されている。そこで、各地域の特徴を簡単に説明しよう。

まず、日本では中世期に中国で製造された銅銭が大量に流入した。しかし、16世紀後半に中国からの流入が途絶し撰銭慣行が横行したために、銅銭は基軸通貨としての地位を失っていくことになった。これにより金・銀・米が貨幣として、様々な形式で利用されていった。江戸幕府はこうした複数の貨幣使用の状況を「三貨制度」として統一していくことになった。金貨は計数貨幣として発行されたが、銀は秤量貨幣で純度のみ公定された⁵¹⁾

「三貨制度」は西日本の銀遣い、東日本の金遣い、小額取引の銅銭と理解されてきたが、実際には、貨幣使用は市場構造と深い関連を持っていた。例えば、東日本でも近畿地方と経済的連関が深かった日本海側では、銀遣い地域が多くみられた。また、西日本でも稲作生産力が高く純農村的な地域では、貨幣よりも米が価値尺度として利用された。さらに、近世後期に入ると西日本の広い地域で銅銭が基準貨幣となっていく。これは銀不足による対応として広まっただけでなく、農村部への貨幣経済の浸透でもあった。つまり、金・銀貨が「地域間通貨」として機能する一方、銅銭は「地域内通貨」としての役割を形成したと看做せるのであった⁵²⁾

次に、中国では14世紀半ばに成立した明王朝は当初元が使用していた鈔(紙

幣)と銅銭を使用し、一部で銀も利用されていた。しかし、紙幣は事実上不換紙幣であったため、すぐに使われなくなった。15世紀半ばから明は銀財政に転換し、16世紀半ばには日本やマニラ経由による中南米の銀が大量に流入して、使用貨幣は銀と銅銭が中心となっていく。中国の銀は日本同様秤量貨幣であったが、明清期を通じて公定の純度が形成されることはなかった。つまり、王朝が公式に発行した貨幣は銅銭のみであった。中国では銀が「地域間通貨」、銅銭が「地域内通貨」の役割をそれぞれ形成していた⁵³⁾

銀は重量単位と純度が地域や業種によって異なり、ベンガルのルピー銀貨と同様の働きをしていた。さらに、銀だけでなく銅銭も地域や業種によって使い分けられていた。それは、特定枚数の銅銭を1,000文、あるいは100文とみなす短陌慣行や私鑄銭の流通、撰銭慣行もみられた。銀だけでなく銅銭も多様であった要因が二点存在した。第一に、銅銭は一度発行されると地域に滞留するため、貨幣需要が供給をしばしば上回る点にあった。しかも、収穫期に銅銭需要が逼迫する季節性も存在した。それらに対応するため、各地域は撰銭慣行によって旧銭や私鑄銭の流通を認めた。第二に、銅銭額面が零細な点であった。日常の小額取引には便利であったが、高額取引には重くて扱いにくく、不便であった。そこで、各地域や業種が高額単位を設けたと考えられる。また、足立氏は銅銭使用からも市場の環節性がみられると論じている⁵⁴⁾

最後に、西ヨーロッパでは中世期に封建化が急速に進展した結果、貨幣鑄造権も分裂し、ドイツだけで500種以上の貨幣が発行された。中世後期には各領邦国家が貨幣同盟を形成し、一定の秩序が実現した。しかし、16世紀に入って貨幣同盟は崩壊し、都市商人による市場ネットワークが秩序形成を行うようになった。このネットワークを支えたのは、13世紀イタリアで生まれ成長した西ヨーロッパ支払決済システムであった。このシステムは、商人・銀行・会社・為替手形・預金貨幣・計算貨幣などによって形成されたのであり、「社会的インフラストラクチャー」と呼べるものであった⁵⁵⁾

当時の西ヨーロッパ地域市場圏も重層的・環節的な市場構造を有していた。

貨幣ごとに使用階層や流通分野が分離され、異なる貨幣が使用された。金貨・高額銀貨による「地域間取引」と小額銀貨による「地域内取引」は分断される一方、「地域間取引」は中世から進展した金融技術の革新、いわゆる「中世商業革命」によって最上層の市場・貨幣流通圏で統合されていった。「中世商業革命」とは、為替手形の成立から手形の振替・決済・資本調達を行うための銀行業の発展、信用取引の普及とそこで使用される信用貨幣の使用、多様な貨幣を価値付ける計算貨幣の使用と信用貨幣との結合、などが挙げられよう。この金融技術革新は商業信用の社会化から債権の社会化、資本取引の社会化を実現したのであった⁵⁶⁾。

近世期の貨幣の多様性は市場構造と密接な関係があったが、それは、この時期の市場の特性が近代のそれと異なっていたためと考えられる。つまり、貨幣の多様性が経済の後進性や市場の未発達を表す指標とは言えないのである。問題は経済合理性を支えリスクを軽減するための法制度や社会制度、組織や慣習の形成にあった。岩橋によれば、商品に対する信頼性の担保や不正行為への対処法など前近代の市場を支えていた秩序は、地域や時代ごとに多様であった。市場を支える秩序原理が国家権力や共同体規制、私的な人間関係と一様でなかったのである⁵⁷⁾。ここから通貨統合と市場発展についても、「前近代社会においては経済合理性が必ずしも優位な価値基準ではないので、経済統合や通貨統合が可能な条件が整ったからといって直ちに通貨統合が進展するわけでない。したがって、史実として一定の通貨統合が確認できないからといって、その地域の市場発展度合いを断定できない⁵⁸⁾」としている。

これらから明らかなのは、貨幣統合は政治権力による一方的な権力行使で達成されるものではなく、市場統合や統一的な市場秩序の提供によって達成されるものだということである。岩橋も貨幣鑄造権は貨幣統合の一つの条件であって、必要条件ではないと論じている⁵⁹⁾。政治権力は貨幣統合に必要な様々な条件を満たし、しかも市場でも必要条件が形成されなければならないであろう。今後の課題として、市場における貨幣統合の条件形成についてである。そのた

めには、市場における貨幣や信用の調整者であった両替商や金融商の役割についてより詳細に研究することが大切となる。本論文との関係では、18世紀ベンガルにおける貨幣市場と金融商の役割、EICによる植民地政策がそれらにどのような影響を与えたのか、これらが重要な課題であると考えられるのである。

注

- 1) Prakash [1988a] p. 475.
- 2) J. C. Sinha [1927] pp. 110-111. 18世紀後半のEICによる貨幣政策については、谷口謙 [2009]、谷口謙 [2010] を参照。
- 3) Mitra [1991] pp. 69-70, 黒田 [2003] 73 ページ。
- 4) Prakash [1988a] p. 479.
- 5) EIC では綿織物や生糸、藍や砂糖などの南アジア産品を購入する形式をこう呼んだ。
- 6) ムガル帝国を中心とする近世南アジアの貨幣制度に関する研究は数多く存在する。以下に挙げたものは、その主立ったものに過ぎない。特に、Richards ed. [1987] と Subramanyam ed. [1994] の二つの論文集はムガル帝国の貨幣システムの性格だけでなく、当時の貨幣に関する様々な問題が取り上げられており、非常に重要な内容を含んでいる。Habib [1982] [1987], Mallick [1991], Prakash [1988a], Richards ed. [1987], Subramanyam ed. [1994].
- 7) 銀をわずかに含んだ銅貨でデリー・サルタナット期に北インドで流通した。Habib [1982] p. 361 を参照。
- 8) Habib [1987] p. 138.
- 9) 1 グレイン=0.0648 グラム
- 10) Habib [1982] p. 361, Habib [1987] pp. 139-140, Prakash [1988a] pp. 475-476.
- 11) Habib [1982] p. 362, Prakash [1988a] p. 477.
- 12) Prakash [1988a] p. 476.
- 13) 鑄造益金はムガル帝国に支払われる一般的な鑄造税とみなされ、その分が貨幣に加えられる価値となり、地金より高くなる。
- 14) Habib [1987] p. 140, Mohsin [1973] p. 115, Prakash [1988a] pp. 477-478.
- 15) Mallick [1991] pp. 35-36. ムガル帝国期の鑄造所システムについては谷口謙 [2010] 88 ページ～92 ページを参照。
- 16) Perlin [1994] pp. 283-284.
- 17) フリン [2010] 69 ページ～70 ページ。
- 18) ファン・サンテン [2002] 139 ページ～143 ページ。

なお、ファン・サンテンおよびスブラマニヤムは、表2が過小評価されていることを指摘している。ファン・サンテンは、VOC文書の信憑性、オランダ船・イギリス船による

地金輸入が示されていないと論じている。また、スプラマニヤムも次の二点を指摘している。第一に、単位がルピーであるため、もし重量に変えれば、1650年以前では喜望峰ルートからの流入量を上回り、1650年以降も近い値かもしくは少し上回るであろうと述べている。第二に、この表がスラト1港のものであり、他の海港でも銀が西アジアから流入していた点を強調している。Subrahmanyam [1991] pp. 200-201 を参照。

- 19) Subrahmanyam [1991] pp. 197-199.
- 20) Habib [1987] pp. 140-156.
- 21) Habib [1982] p. 361, Prakash [1988a] p. 478.
- 22) N. K. Sinha [1968] pp. 129-130.
- 23) デカン諸王国と呼ばれる国々は14世紀半ばに成立したバフマニー王国から分かれたものであった。諸王国は15世紀末から16世紀始めにそれぞれ成立したが、17世紀に入ってムガル帝国の侵攻に遭い、1686年に全ての王国がムガル帝国に併合された。近藤 [1997] 86ページ～88ページを参照。
- 24) Habib [1982] p. 361, Perlin [1994] p. 281-282, Prakash [1988b] p. 160.
- 25) Habib [1982] p. 360, Perlin [1994] pp. 280-283, Prakash [1988b] pp. 159-160.
- 26) Subrahmanyam [1994] pp. 193-195.
- 27) Mohsin [1973] pp. 119-120.
- 28) SRs. はシッカ・ルピー, CRs. はカレント・ルピーの省略記号である。
- 29) この時期のムルシダバードでは、鑄造益金が2.5%, 鑄造費が1.03%であったことから考えると、割引率は明らかに鑄造手数料を越えている。Perlin [1994] p. 305, Table4, Prakash [1988a] p. 481 を参照。
- 30) Mohsin [1973] p. 120, Steuart [1772] pp. 6-11, 谷口謙 [2009] 98ページ～101ページ。
- 31) Mohsin [1973] pp. 116-117.
- 32) Mohsin [1973] pp. 121-122.
- 33) Prakash [1988a] p. 479.
- 34) Chakrabarti [1997] p. 75, J. C. Sinha [1927] p. 113, N. K. Sinha [1965] p. 130.
- 35) Mitra [1991] pp. 76-78, J. C. Sinha [1927] pp. 113-116.
- 36) Mitra [1991] pp. 70-73.
- 37) J. C. Sinha [1927] pp. 113-116.
- 38) Hunter [1876b] pp. 390-391, 谷口晋 [1987] 84ページ。
- 39) Hunter [1876a] pp. 244-245, p. 303.
- 40) 正確なことは明らかではないが、純度が150グレイン程度であったようである。カレント・ルピー換算では11/10 カレント・ルピー。J. C. Sinha [1927] p. 115, N. K. Sinha [1965] p. 131 を参照。
- 41) Hunter [1876b] pp. 245-247, pp. 276-278.
- 42) Bayly [1988] Introduction, Ch. 1 および Ch. 2, Perlin [1994], Washbrook [1988].

- 43) 谷口晋 [1996] 6～8 ページ, 三木 (神田) [2000] 72 ページ～75 ページ。
- 44) 谷口晋 [1996] 14～17 ページ, 三木 (神田) [2000] 73 ページ。
- 45) 三木 (神田) [2000] 70 ページ～71 ページ。
- 46) Perlin [1994], 黒田 [1994] 1 章, 4 章, 5 章, 黒田 [2003] 序章, 2 章, 3 章, ブロック [1982].
- 47) 黒田 [2003] 84 ページ～90 ページ。
- 48) 本山 [1986] 186 ページ～191 ページ, 218 ページ～224 ページ, 251 ページ～253 ページ。
- 49) パーリンによれば, 17 世紀に貝貨などの非規格貨幣は南アジア全体に広がったが, その要因として 17 世紀前半の銅供給の減少と貨幣需要に銅貨鑄造が追いつかなくなったことの二点が挙げられる。Perlin [1987] pp. 241 - 245, Perlin [1994] pp. 283-288 を参照。
- 50) Perlin [1994] pp. 288-294.
- 51) 岩橋 [2002] 431 ページ～433 ページ。
- 52) 岩橋 [2002] 441 ページ～443 ページ。
- 53) 岸本, 宮嶋 [1998] 154 ページ～157 ページ, 162 ページ～164 ページ, 濱島 [1994] 64 ページ～65 ページ。
- 54) 足立 [1994] 135 ページ～140 ページ, 黒田 [2003] 93 ページ～117 ページ。
- 55) 名城 [2006] 13 ページ～14 ページ。
- 56) 名城 [2006] 15 ページ～33 ページ。
- 57) 岩橋 [2004] 18 ページ～19 ページ。
- 58) 岩橋 [2004] 22 ページ。
- 59) 岩橋 [2004] 22 ページ。

参 考 文 献

- 足立啓二 [1994] 「清代の経済発展」, 谷口規矩雄編『アジアの歴史と文化4 中国史—近世Ⅱ』, 同胞舎。
- Bayly, C. A. [1988] *Indian Society and the Making of the British Empire (The New Cambridge History of India Vol. II-2)*, Cambridge University Press, Cambridge.
- ブロック, マルク [1982] 「中世の金」, 『西欧中世の自然経済と貨幣経済』, 森本芳樹訳, 創文社。
- Chakrabarti, Shubhra [1997] 'Intransigent Shroffs and the English East India Company's Currency Reforms in Bengal, 1757-1800', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol. 34, No. 1.
- フリン, デニス [2010] 『グローバル化と銀』, 秋田茂・西村雄志訳, 山川出版社。
- チャンドラ, サティシュ [1999] 『中世インドの歴史』, 小名康之・長島弘訳, 山川出版社。
- Habib, Irfan [1982] 'The Monetary System and Prices', Tapan Raychaudhuri and Irfan Habib ed,

- in *The Cambridge Economic History of India Vol. 1*, Cambridge University Press, New Delhi.
- Habib, Irfan [1987] 'A System of Trimetallism in the Age of the 'Price Revolution': Effects of the Silver Influx on the Mughal Monetary System', in J. F. Richards ed, *The Imperial Monetary System of Mughal India*, Oxford University Press, Delhi.
- 濱島敦俊 [1994] 「変貌する社会」, 谷口規矩雄編『アジアの歴史と文化4 中国史—近世II』, 同胞舎。
- Hassan, Aziza [1994] 'The Silver Currency Output of the Mughal Empire and Prices in India during the 16th and 17th Centuries', in Sanjay Subrahmanyam ed, *Money and the Market in India 1100–1700*, Oxford University Press, Delhi.
- Hunter, W. W. [1876a] *A Statistical Account of Bengal*, v. 3. *Districts of Midnapur and Hugli (including Howrah)*, D. K. Pub. House, London.
- Hunter, W. W. [1876b] *A Statistical Account of Bengal*, v. 4. *Districts of Bardwan Bankura and Birbhum*, D. K. Pub. House, London.
- Hunter, W. W. [1876c] *A Statistical Account of Bengal*, v. 7. *Districts of Maldah Rangpur and Dinajpur*, D. K. Pub. House, London.
- 岩橋勝 [2002] 「近世の貨幣・信用」, 桜井英治, 中西聡編『流通経済史』, 山川出版社。
- 岩橋勝 [2004] 「前近代通貨統合をめぐる若干の史的考察」『松山大学論集』第16巻, 第1号。
- 岸本美緒, 宮嶋博史 [1998] 『明清と李朝の時代』(世界の歴史12), 中央公論社。
- 小谷汪之編 [2007] 『世界歴史大系 南アジア2—中世・近世—』, 山川出版社。
- 近藤治 [1997] 「中世インドとヒンドゥー文化」, 近藤治編『アジアの歴史と文化10 南アジア史』, 同胞舎。
- 黒田明伸 [1994] 『中華帝国の構造と世界経済』, 名古屋大学出版会。
- 黒田明伸 [2003] 『貨幣システムの世界史: 「非対称性」をよむ』, 岩波書店。
- Mallick, B. S. [1991] *Money, Banking, and Trade in Mughal India: Currency, Indigenous Fiscal Practices, and the English Trade in 17th Century, Gujarat and Bengal*, Rawat Publications, Jaipur.
- 三木(神田) さよこ [2000] 「18世紀末～19世紀前半におけるベンガルの穀物流通システム: 穀物交易をめぐるインド商人とイギリス東インド会社」『社会経済史学』第66巻 第1号。
- Mitra, D. B. [1991] *Monetary System in the Bengal Presidency, 1757–1835*, K. P. Bagchi, Calcutta.
- Mohsin, K. M. [1973] *A Bengal District in Transition: Murshidabad 1765–1793*, Asiatic Society of Bangladesh, Dacca.
- 本山彦彦 [1986] 『貨幣と世界システム—周辺部の貨幣史』, 三嶺書房。
- 名城邦夫 [2002] 「近世初期ドイツにおける帝国貨幣法 Reichsmünzordnungen の意義」『名古

屋学院大学論集』第38巻, 第4号。

名城邦夫 [2006] 「中世後期・近世初期西ヨーロッパにおける支払決済システムの成立—計算貨幣による市場統合—」『名古屋学院大学論集』第43巻, 第1号。

Perlin, Frank [1987] 'Money-use in Late Pre-colonial India and the International Trade in Currency Media', in John F. Richards ed, *The Imperial Monetary System of Mughal India*, Oxford University Press, Delhi.

Perlin, Frank [1994] 'Changes in Production and Circulation of Money in Seventeenth and Eighteenth Century India: An Essay on Monetization Before Colonial Occupation', in Sanjay Subrahmanyam ed, *Money and the Market in India 1100-1700*, Oxford University Press, Delhi.

Prakash, Om [1988a] 'On Coinage in Mughal India', *The Indian Economic and Social History Review*, 25-4.

Prakash, Om [1988b] *European Commercial Enterprise in Pre-colonial India—The New Cambridge History of India*, London.

Richards, John F. ed. [1987] *The Imperial Monetary System of Mughal India*, Oxford University Press, Delhi.

佐藤正哲, 中里成章, 水嶋司 [1998] 『ムガル帝国から英領インドへ』(世界の歴史14), 中央公論社。

Sinha, J. C. [1927] *Economic Annals of Bengal*, Macmillan, London.

Sinha, N. K. [1965] *The Economic History of Bengal*, Vol. 1, Calcutta.

Steuart, James [1772] *The Principles of Money Applied to the Present State of the Coin of Bengal*, London.

Subrahmanyam, Sanjay [1994] 'Precious Metal Flows and Prices in Western and Southern Asia, 1500-1750: Some Comparative and Conjunctural Aspects', in Sanjay Subrahmanyam ed, *Money and the Market in India 1100-1700*, Oxford University Press, Delhi.

Subrahmanyam, Sanjay ed. [1994] *Money and the Market in India 1100-1700*, Oxford University Press, Delhi.

谷口謙次 [2009] 「18世紀後半のイギリス東インド会社の貨幣政策」, 籠谷直人・脇村孝平編『帝国の中のアジア・ネットワーク—長期の19世紀アジア』, 世界思想社。

谷口謙次 [2010] 「18世紀末ベンガルにおけるイギリス東インド会社の鑄造所改革」『経済学雑誌』, 第110巻, 第4号。

谷口晋吉 [1987] 「19世紀初頭北ベンガルの流通と手工業: プキャン報告に基づいて」『一橋論叢』第98巻, 第6号。

谷口晋吉 [1994] 「18世紀後半北部ベンガルの農業社会構造(3)」『一橋大学研究年報 経済学研究』第35巻。

谷口晋吉 [1996] 「18世紀後半ベンガル農業社会の貨幣化と農民市場に関する一試論」『一橋論叢』第116巻, 第6号。

ファン・サンテン, H. W. [1992] 「グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社 1620 年–1660 年 (IV)」, 長島弘訳, 『長崎県立大学論集』, 第 26 巻, 第 2 号。

ファン・サンテン, H. W. [2002], 「グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社 1620 年–1660 年 (V)」, 長島弘訳, 『長崎県立大学論集』, 第 36 巻, 第 2 号。

Washbrook, D. A. [1988] 'Progress and Problems: South Asian Economic and Social History c. 1720-1860', *Modern Asian Studies*, 22-1.